

## 第1回 多摩市自治推進委員会 要点記録

日 時：令和3年12月14日(火) 18:00～20:00

場 所：多摩市役所3階 特別会議室

出席委員：大杉覚委員、小山弘美委員、寺田美恵子委員、林久美子委員、塩沢泰弘委員、丸茂嶺介委員

オブザーバー：合同会社 MichiLab 高野義裕代表

事務局：阿部市長、浦野副市長、藤浪企画政策部長、田島市民自治推進担当部長、小野澤健康福祉部長、松崎福祉総務課長、原島健幸まちづくり推進室長、秋葉企画調整担当主査、西村企画調整担当主査、長

傍聴者：0名

議事次第：配付資料「第1回 多摩市自治推進委員会 議事次第」のとおり

### 1 開会

事務局 第1回第八期多摩市自治推進委員会を開催する。まず、資料の確認を行う。

#### 配布資料の確認

進行については、委員長が決定するまで事務局が行う。始めに委嘱状の交付を行う。

#### 委員全員に委嘱状交付が行われた。

次に、市長挨拶に移る。

市長 第八期多摩市自治推進委員会に参加いただき、お礼を申し上げます。前期の2年間では、新型コロナウイルス感染症の影響もあり、大変な苦労もあったと思う。私たち地方自治体にとってこの2年間は、国と市の関係性といった地方自治や地方分権について改めて考える機会が数度にわたってあった。現在調整中である10万円の臨時特別給付やワクチン接種、保健所の有無によって格差が生じている。情報提供などにおいても、国と協力してやっていくものの、自治事務とされ、地方自治体が主体となって進めている。どのような形で市民の方に提供するのか、それらの手続等を重ねていくことが「自治」であり、その根幹は「地域コミュニティ」である。また地域のことと地球規模の課題もつながっている。さらに今回はサラリーマンであり地域の中で活躍されている市民委員のお二人も迎えるが、企業のビジネスでもローカル・コミュニティとクロスする時代となっている。地域の中で起きている高齢化や子育ての問題などにおいては情報共有や顔の見える組織が重要となってくる。第七期では、そうした観念をまとめてもらい、きっちりとした組織よりゆるやかなつながりづくりを報告してもらったが、DX時代でありネットや様々なツールを多くの人々が利用できる時代となりそうしたつながりを生む機運ができつつある。とは言え、基本的な営みは変わらない。それは、生きること、食べることやお互い支え合うことにあたる。個を強めていくことはもちろんだが、家族だけでなく地域で支え合うためのしくみづくりについては第七期で提出いただいた報告書をベースに第八期で議論していただきたい。地域共生社会、コミュニティビジネス、コミュニティスクールなどいろいろな立場からも使える共通したプラットフォームの形成を期待している。一人ひとりが輝いて核になる地域社会に向けて、この委員会は多摩市の未来を決定する委員会になると感じている。

## 2 委員紹介

事務局 次に、委員紹介に移る。

各委員から自己紹介が行われた。

事務局 次に、本日出席のオブザーバーから一言いただきたい。

オブザーバーから自己紹介が行われた。

事務局 次に、事務局職員の紹介を行う。

その他事務局職員の自己紹介が行われた。

事務局 自治推進委員会初回のため、副市長からも挨拶をお願いしたい。

副市長 これから2年間の期間中、是非皆さんの日頃の経験から、多摩市らしい地域共生社会をどのように築いていくべきか、様々なご意見をいただきたい。前期での議論を踏まえ継続することや、新たな観点で検討すべきこともあると思う。至らない点も多いかも知れないが、事務局も皆様と力を合わせて第八期の委員会が活発にご議論・ご活動いただけるよう務めたい。ご協力をお願いしたい。

## 3 多摩市自治基本条例について

事務局 次に、条例について説明する。

事務局より、資料2に基づき説明を行った。

## 4 委員長及び副委員長の選任

事務局 次に、委員長、副委員長の選任に移る。どなたか意見・推薦はあるか。

委員による意見・推薦なし

それでは、事務局から、地方自治に識見を有するものとして就任いただいた大杉委員を委員長に推薦したい。

委員全員の賛成により、大杉委員を委員長に選任した。

続いて、副委員長の選任となるが、どなたか意見・推薦はあるか。

委員長 地域コミュニティについての研究を進めている小山委員を推薦する。

委員全員の賛成により、小山委員を副委員長に選任した。

事務局 委員長、副委員長から就任にあたり一言お願いしたい。

委員長 前期に続けて委員長を務めるにあたり、中間報告の内容を具体化し、実現に向けて検討を進めなければいけないと思っている。皆様の協力を得ながら、会議を円滑に進めていきたい。

副委員長 委員長を補佐する形で、委員会での議論が活発になるよう援助していきたい。

事務局 これ以後の進行は委員長にお願いする。

## 5 会議運営に関する事項の確認について

委員長 それでは続いて、会議運営に関する事項の確認について、事務局から説明をお願いしたい。

事務局より、資料3に基づき説明を行った。

委員長 事務局の説明について、意見や質問はあるか。

意見・質問なし

6 第六期までの多摩市自治推進委員会の取り組みについて

委員長 続いて、多摩市自治推進委員会の第六期までの取り組みについて、事務局から説明をお願いしたい。

事務局より、資料4に基づき説明を行った。

7 第七期での議論と今後の議論の方向性について意見交換

委員長 続いて、第七期での議論と今後の議論の方向性について意見交換に移る。事務局より、説明をお願いしたい。

事務局より、資料5、6、参考資料3、4に基づき説明及び東寺方小学区エリアミーティング（令和3年12月12日開催）についての報告を行った。

委員長 12日に開催されたエリアミーティング（東寺方小学区）に参加した委員からご感想をいただきたい。

委員 多世代の方と交流でき、個人で得られた気づきは多かった。またカードを使った自己分析は、就職活動期以来であり大変有意義であった。一方で、あと残り2回のエリアミーティングの中で、どこまで具体的に市民の方のやる気やモチベーション向上につなげていけるのか気になった。またこういったイベントに参加するにも「時間」や「距離」などの制約がある中で、どこまで個人の行動につなげられるのかが課題だと感じた。

委員長 その他、事務局の説明について、意見や質問はあるか。

意見・質問なし

委員長 続いて、今後の議論の方向性について意見交換に移る。

参考資料4に、第八期の任期で議論すべき方向性を時間軸に合わせて、たたき台として提示していただいた。ウィズコロナ時代の地域コミュニティの在り方について、日ごらの活動や生活の中で考えていることや、今までの説明を聞いて考えたことを自由に意見交換していただきたい。可能であれば、まずはモデルエリアで実際に活動して下さっているオブザーバーの、地域の中に入って感じたことをお話いただきたい。

オブザーバー まず諏訪中学区については、元々地域にある組織が活発に活動している印象がある。一方青陵中学区は、組織はあるがあまり主体的になって色々な取り組みをやっている印象はない。それら2つのエリアで活動していて感じていることは、諏訪中学区については色々な動きがあるものの、実際活動の中に入ってみると世話人会が中心となっているが、事務局の社会福祉協議会が主体となって動いているなど、一部の方の負担でまわっていることがわかった。最初に思っていた市民がそれぞれ活動しているイメージとのギャップを感じたことから、地域の方がみんなで一緒になって地域をつくっていくという形に近づけていく取組が必要だと思っている。また、実行委員会があっても、平日の日中に会議があるなど、働いている世代にとって時間的に参加しづらい。ただ自分自身がそう感じているだけで、人によって参加しやすいタイミングは違うため、多様な人がそれぞれ参加しやすいしくみづくりが必要だと感じた。一方青陵中学区は、地域の声に応える形でイベントを開催すると反応が良く、地域福祉推進委員会の方も賛同してくれるなど、手ごたえを感じている。そのため、新型コロナウイルス感染症が落ち着き、イベントを積極的にやれば変わ

っていく地区だと感じている。どちらの地区も次のステップに進むにあたり、皆様のご意見を取り入れたい。

- 委員長 とても重要な点をあげてもらった。諏訪中学区で例示してもらった新たな方が入りにくい環境になってしまうという事例は、地域の中で取り組みをしようとしたときによくある事例。従来型の活動方法だと、どうしても幅広い人が参加するしくみにはなりにくい。青陵中学区については、具体的にどのような点で反応が良いと感じたのか教えていただきたい。
- オブザーバー 一番驚いたことは、宣伝を積極的に行えなかったイベントだったにも関わらず、参加した方がその日のうちに違う方を呼んできて、参加者が増えていったという事例であった。またアンケートにおいても、応援してくれるような温かいお言葉を多くもらったことで、反応の良さを感じた。
- 委員長 青陵中学区では、地域として何か活動をやっているわけではないのか。
- オブザーバー 私の認識が合っているかわからないが、団地が多い地区でもあるため、昔は団地ごと、また団地同士で一緒にやっていたイベントはあったが、そうした団地単位や団地同士での活動は減っているように感じる。最近のイベントは、ほとんど地域に拠点をもっている企業が主体となって開催している。また以前は商店街もイベントを開催していたが、新型コロナウイルス感染症の影響により近年は開催できていない状況だと認識している。
- 委員長 昔のつながりが強かったため、こちらがしかけたイベントへの反応が良かったのかもしれない。皆さんもそれぞれの地区と対比して、何かご意見があればいただきたい。
- 副委員長 先ほどオブザーバーからお話いただいた平日に開催しているような地域活動に、若者を引き込むことを考えると、従来のしくみでは難しい。またいただいた第七期の中間報告を拝見して、地域ごとに区切って考えていくことは非常に難しいと感じた。若い世代の方は、自分自身が何地区に住んでいるということは意識していないのではないのか。世代によってフェーズを変えていく必要がある。現在の区切り方は「つなげる」には良いかもしれないが、「掘り起こす」を進めるには若者が興味を抱くような方法を考える必要があるのではないのか。
- 委員長 委員は、東寺方小学区で開催したエリアミーティングに参加されたようですが、なぜ参加されたのか。
- 委員 自治推進委員会の委員を務めるにあたり、第七期の委員会を経て形になった地域活動に参加して状況を体感したかった。
- 委員長 エリアの雰囲気の違いを感じた等、実際に参加した感想を聞かせていただきたい。
- 委員 第1回はエリアに限った内容ではなかったため、参加しやすかった。副委員長のおっしゃる通り、エリアミーティングをその地区に限った内容にする必要はないと感じた。
- 副委員長 エリアミーティングの内容を今後実際の地域活動に落とし込む際、地区に落とし込んでしまうとギャップが生じてしまう心配がある。
- 委員 私は今回諸事情により参加できなかったが、昨年は2回エリアミーティングに参加した。地域活動というと、そこに参加される方は比較的高齢であり、固定メンバーばかりの印象である。メンバーが固定してしまうと、議論を繰り返したところでどうしても同じ話題になってしまう。そういった状況の中で若者世代など新しい方をどう誘い込むかが課題であ

る。固定のメンバーではなく新しい方を呼び込むことで、世代やエリアを超えた議論ができ、ワクワク感や刺激を与えられる内容になって次も参加してみようという人材を増やすことができるのではないかと考えている。また、妻が昔から児童館にお世話になっており、そのコミュニティのつながりから、読み聞かせの会をやっていたが、新型コロナウイルス感染症の影響により現在休止している。そういった地域の中だけで活動してきた取り組みに対して、例えば金銭面や人手の面で企業側をもっと巻き込めるのではないかと考えている。社会課題の解決は企業も注目しており、また企業は社会的責務を果たすことを求められている。企業側も地域と関わっていきたく感じている現状をうまく活かすように、マッチングできないかと考えている。結果としてそれが楽しいコミュニティづくりにつながっていけば、自然と参加者も増えていくのではないかと考えている。

委員 エリアの分け方については、実際の生活や暮らしの関わりとはずれる部分もある上、興味や関心をもつテーマは、地区の中では収まるものではない。ただ10に区分した地区ごとの単位を基本として進めることで、隣や近くの地区と興味や関心、課題としているテーマを比較したり分析していくという捉え方もあるのではないかと考えている。また、過去にNPOセンターという中間支援組織が存続できなかったことの原因を反芻していることもあり、中間支援組織を新たにつくることに対して疑問を持っていた。この間、ニュータウン50周年ということもあり、諏訪永山で多様な活動ができてきて、また合同会社 MichiLab が開催した「ぱらあーと」というイベントを拝見した際、いろいろな企業も参画して多様な主体がつながり、掘り起こされる仕掛けをいくつか感じた。またその仕掛けにより、地域の空気感や風景が変わった様子を見て、中間支援組織をつくる意味を感じた。私たちは暮らしの中でそれぞれテーマを持っているため、つい目先のことに追われてしまい、新しい世界が目の前にあることに気が付かない。それが中間支援組織の存在により払拭されるように感じた。またもう1点、市民の行政に対する信頼感において、組織として地域に参加する意義は大きいと感じている。市民一人ひとりが集まった集団が信頼を得るには時間がかかるが、しっかりと組織の動きが背後に感じられるだけで、大きな信頼を迅速に得られることを、NPO法人で活動した20年間の中で強く感じた。それらにより、社会資源の融合が地域をつくっていくことを実感したため、第八期は前向きにプラットフォームづくり等を進めていきたい。

委員長 本質を突いた発言をいただいた。この2年間に中間支援組織や行政が現場に顔を見せてきたことで、共助を支える公助の組織体があるという在り方の意味を考え直すきっかけになっている。その具体的な形が見えてきたことで、これから取り組むことへの納得感が高まってきたのではないかと考えている。

委員 個人と個人の信頼関係も大切だが、大小関わらず組織と組織の信頼関係も非常に大切。信頼がないと自分自身の思いを提示したり、相談することは難しい。また信頼関係の醸成は空気をつくり方が大切になり、どのようにその空気をつくっていくのかについても大事になってくる。

委員 エリアの分け方については、自分自身これまでこだわっていなかったつもりだったが、委員の話聞いて凝り固まっていたことを改めて感じた。新しい委員の方が委員会に入り、様々な意見をいただくことで、新たな気づきを得ることができた。地域課題については、

子育てのことや福祉のことなどその地域に深く関わっている問題は実際に存在するため、そういった観点から地域ごとにエリア分けをするということは良いのではないか。ただエリアに収まらないアートなどの取り組みもこれからは重要であり、色々とところから参加できる枠組みも必要であると感じた。この構想を実現して実際に動かしていくために、中間支援組織や地域担当職員が地域の活動を横断的につなげる役割を担うことで、横のつながりが強くなり重層的なしくみになっていくのではないか。

委員長 これまでの議論を通して、ご意見やご質問があったらお願いします。

副委員長 企業に勤めて昼間地域にいない市民委員であるお二人のご意見を伺っていると、「楽しく」「学びながら」社会課題を解決していきたいという姿勢が見えて、社会課題の捉え方が違うように感じた。それが若い世代の共通意識であり、それがどこかで元々存在する委員会や組織とマッチングできれば良いのではないかと感じた。

委員長 問題解決には、包摂的なアプローチ方法と、ピンポイント課題解決型に分けられると考えている。企業に勤めていると、ピンポイント課題解決型が強くなってくると感じている。一方地域で一般的に活動している方は、どちらかと言うと1点だけ解決すれば良いとは考えていない。この両者は突き詰めていくと、対立関係にある場合もあるが、上手に組み合わせさせて融合させ接点を探っていくことが、コミュニティづくりで重要な点だと考えている。そのしくみをどう落とし込むかを今期の委員会で考えていきたい。

## 8 その他

委員長 続いて、その他に移る。事務局より何かあればお願いしたい。

事務局 次回は、令和4年2月17日(木)午後6時00分から、本会場で行う。また、感染状況次第ではあるが、今後実際にモデルエリアを見て回る街歩き等の機会も設けていきたい。

委員長 それでは、第1回の多摩市自治推進委員会をこれで閉会する。

□ 閉会